

グローバル化時代の人材育成を考える②

異文化と協同する力を育み
郷土への誇りを醸成する

高知県・私立土佐塾中学・高校「高知元気人プロジェクト」

グローバル化社会で活躍できる人材の育成について3号連続で取り上げる本コーナー。今回は学校事例として、高知県の土佐塾中学・高校（以下、土佐塾高校）がオバマ大統領の出身校でもあるアメリカのハワイ州プナホウ・スクールと連携して行った5日間のインターナショナルキャンプを中心とした実践をまず紹介する。

日米の高校生が
協同して地域に貢献する

ハワイ州の私立高校プナホウ・スクール (Punahou School) 以下、プナホウ)と土佐塾高校との交流事業が計画されたのは2012年7月。プナホウが日本での交流先を探していると知った土佐塾高校が「高知に海外の生徒を招くチャンス」と、研修プログラムの策定に乗り出した。

だが、当時国際部長を務めていた藤澤佑介先生は、交流のテーマに悩んだという。それは、プナホウの要望が「日本での地域貢献（コミュニ

ティサービス)の体験」だったからだ。

「プナホウはこれまで、清掃や植林など、それぞれの地域に合った貢献活動を行っていました。そんな彼らの期待、意欲に応えるにはどんなプランが考えられるのか……熟考した

末、私たちは『日本の生徒と協力しながら、高知の現状を世界に発信してもらおう』という案にたどり着いたのです。小さな地域のために国の違いを越えて協同することは世界平和を築く第一歩であり、ぜひ教育の場で生徒たちに体験させたいと思いましたが」(藤澤先生)

土佐塾高校の生徒と一緒に、県内

のさまざまな場所で見学やインタビューを行い、高知県の魅力を日米の高校生の言葉でPRするという、異文化間の協同を柱にしたプランにプナホウは共感し、13年7月の実施が決定した。

自校の生徒に期待したのは、郷土への誇りの醸成だ。

「本校の生徒も行ったことがないような場所をハワイの高校生と一緒に巡り、地域の良さを生かして頑張っている人の話を聞くことで、地元の魅力を再発見し、誇りを抱くことが出来るようになりました。生徒の多くは県外に進学しますが、どんな形であ

れ、高知にかかわり続ける人材になってほしいと思っています」(藤澤先生)

協同作業を通して深く
コミュニケーションする

「高知元気人プロジェクト」と銘打って、土佐塾高校内で参加者を募集したのは13年5月頃だ。

事前学習は、昼休みを活用した簡単な英会話の講習くらいしか時間が取れなかった。日米の生徒のコミュニケーションの質が今回のプロジェクトの成否を決めるため、双方の語学力でコミュニケーションをうまく取れるのか、最後まで不安は消えな

かった。また、プナホウの教師からも「参加者には日本語が全く出来ない者もいるが、本当に地域貢献は体験できるのか？」と実施直前まで何度も確認の連絡があったという。新しい試みゆえに、双方とも不安だったのだ。

7月末、日米双方からほぼ同数、計28人の生徒が4、5人ずつのグループをつくり、「高知元気人プロジェクト」がスタートした。土佐塾高校からの参加者は1・2年生で、海外留



高知県・私立土佐塾中学・高校
藤澤 佑介 ふじさわ ゆうすけ
教職歴7年。同校赴任歴8年目。「見通しの不透明さを教師が受け入れたことが成功の要因です」

高知県・私立土佐塾中学・高校
井田 マックス いだ・まっくす
教職歴1年。同校赴任歴2年目。「私にも新しいことが出来るんだという自信になりました」

高知県・私立土佐塾中学・高校

- ◎設立 1987（昭和62）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約210名
- ◎13年度入試合格実績 国公立大は、東京大、京都大、大阪大、高知大などに81人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ333人が合格。（現役のみ）
- ◎住所 〒780-8026 高知県高知市北中山85
- ◎電話 088-831-1717
- ◎Web Site <http://www.tosajuku.ed.jp/>

「高知元気人プロジェクト」概要

◎アメリカのハワイ州にあるプナホウ・スクールが、約1か月間日本に滞在するプログラムを実施。京都、広島でそれぞれ地元の高校と交流することが決まっていたが、土佐塾高校の国際部が高知県内の活動を企画し、プナホウ・スクールに提案したところ、土佐塾高校の生徒との交流が決定。「高知元気人プロジェクト」は、土佐塾高校の生徒とプナホウ・スクールの生徒が協同で実施するプロジェクトである。

■テーマ

高知を元気にしようという人と出会って、彼らの活動の価値を高校生の言葉で発信する

■狙い

日本の生徒にとっての異文化に暮らすハワイの生徒と共に高知のローカルを見つめ、グローバルに発信する協同プロジェクトに取り組む。そのことによって以下の力を身に付ける。

- ①自ら課題を発見し、行動するバイタリティー
- ②グローバル社会で活躍できる国際人としてのコミュニケーション能力
- ③ローカルに対する愛郷心や自尊心

■参加者

ハワイ州の私立学校、プナホウ・スクールを中心とした生徒13人、土佐塾高校の生徒15人

■スケジュール（インターナショナルキャンプ部分を中心に抜粋）

- 7/20 プナホウ・スクールの生徒が高知に到着。
- 7/21 国立室戸青少年自然の家へ。土佐塾高校の生徒が合流。（インターナショナルキャンプ開始。昼間は県内の各地で「元気人」にインタビュー。夜間は宿舎でプレゼンテーションの準備）

日米の生徒が訪ねた「元気人」（抜粋）

- 製塩業者「田野屋塩二郎」／東京から1ターンし、高知の塩づくり名人に弟子入りし、独立した製塩業者に、塩づくりにかける思いを聞いた。
- 安田町小川地区「せせらぎの郷小川」／郷土料理の「田舎寿司」の作り方を体験しながら、過疎化が進む地域の伝統や文化について学んだ。
- 大心劇場／安芸郡安田町にある名画座。昔ながらの映画館を守る館主にその意気込みと、過疎地域に光を灯し続ける使命感を聞いた。

- 7/25 国立室戸青少年自然の家から土佐塾高校へ。翌26日にもプレゼンテーションの最終準備。
- 7/27 土佐塾高校1年生に向けてプレゼンテーション。



地元の「おばちゃん」に教えてもらいながら、高知県の郷土料理「田舎寿司」を作る



宿舎では、その日の活動をグループで振り返り、気付いたことをまとめていく

学や英語学習に興味を持つ生徒が多かったが、語学力という点では平均的な生徒が大半だった。

今回のプロジェクトでは、キャンプ中に高知県東部の「元気人」にインタビューを行い、そこで分かったことをまとめ、キャンプ終了後に土佐塾高校の1年生に対してグループごとに英語で発表する場が設けられていた。土佐塾高校の生徒にとってプロジェクトに参加しなかった仲

間に対して、プナホウの生徒にとっては外国の生徒に対してプレゼンテーションをする機会となるわけだ。「キャンプ後のプレゼンテーションは、双方の生徒にとって活動のよい動機付けになりました。『元気人』へのインタビューの後、宿舎ではグループごとに、『元気人』の話を聞いて分かったことを英語でまとめたり、翌日訪ねる『元気人』への質問を考えたりしていました」（藤澤先生）

出会った当初はやや交わりが少なかった日米の生徒だが、プレゼンテーションの準備という作業を通して打ち解けていった。だが、日米の生徒の壁を一気になくしたのは、「遊び」の時間だった。ハワイ出身で、キャンプ当日もゲームやキャンプファイヤーで日米の生徒を楽しく盛り上げた英語科の井田マックス先生は言う。「プナホウの生徒が本校の生徒にフ

晴らしいコミュニケーションツールになりました。プナホウの生徒は、自分たちの誇りであるフラダンスを教えるため、リーダーシップを存分に発揮し、本校の生徒も生演奏による本場のフラダンスに心から感動していました。後日、プナホウの生徒が『つながりがこのプログラムのキーワードだった』と振り返っていました。先生はまさにつなりの象徴でした」

コミュニケーションを「言葉で成り立つもの」から、作業や遊びなど「一緒に何かをすること」というイメージへと生徒が深めることが出来たのは、期待を上回る成果だったと藤澤先生は振り返る。

「言葉がなくても笑い合えばつながれる」という気持ちが生まれ、その満足感の中で『もっと英語が出来れば……』という気付きを得たようです。打ち解けて、つながったから『もっと』という言葉が出てくるのだと、私たちも生徒に学びました」

楽しい環境でこそ 向上心は生まれてくる

キャンプ後のプレゼンテーション

は「教師の想定を上回る見事な出来」と藤澤先生。井田先生も「言葉も文化も違う人と一緒に、ここまでのことが出来たということは自分に対する自信になったはず」と評価する。普段の高校生活で味わうものとは別格の達成感を生徒は得たようだ。

「このままでは駄目だと不足を知ること、確かに行動の源になります。しかし、自分はこれでよいのだと確認することで、その後の行動に自信を持つことも事実です。そういう自信を持つことは、国際交流の大事な狙いの1つだと思えます。普段とは違って簡単に意思疎通できない相手だからこそ、『出来た、伝わった』という感動、そして得られる自信が大きいのだと思います。それぞれの生徒がそうした気持ちになれる工夫が出来ることが、国際交流の課題でしょう」(藤澤先生)

重要なのは「楽しさ」だと井田先生は断言する。

「楽しいから、もっと頑張ろう、努力しようと思えるのではないでしょう。日本の生徒はアメリカの生徒に比べると、『本当はこうありたい』という自分像を表に出しません。生

参加した生徒の声

1

田中友之さん (土佐塾高校1年)

情熱や価値観など、 言葉では伝えにくいものがあることが分かりました



このプロジェクトに参加したのは、高知県内の自分もあまりよく知らない場所で外国の人と交流するのが面白そうだったからです。キャンプ生活を共にすることで、英語がうまくなるかも……という期待もありました。

い伝えることはとても難しいことに気が付きました。逆境を乗り越えようとする心意気や、古いものを大切にしている日本の心など、言葉ではなかなかうまく伝えられないものがあることが分かり、もどかしさも少し感じました。

英語は、僕の発音が悪くてなかなか通じませんでした。でも、2日、3日と経つうちに、少しずつ打ち解けていきました。フラダンスを教えてもらった時、最初は恥ずかしかったのにだんだん楽しくなってきたので一緒に体を動かして、笑ったことで仲間になれた気がします。

外国の人と協同作業が出来たことで、自分に自信が持てましたし、今度は自分が知らない世界に行きたいという思いが強くなりました。プロジェクトに参加したことで、自分は少し変わったのだと思います。

高知県を盛り上げようとしている人が各地にいることを、僕はこのプロジェクトで初めて知り、そうした人たちの情熱をハワイの生徒に伝えたいと思いました。でも、どんな仕事を説明することは出来ても、思



「高知の自然や生活を題材に歌う歌手活動もする。大心劇場館主の話聞き、彼の故郷への思いは英語では伝えきれないと感じました」(田中さん)

徒が『こうありたい自分』を素直に出せる楽しさ、安心感のある環境をつくれれば、生徒は自分で学ぶのだと思います」（井田先生）

その土地に生きる人の存在の重みに気が付いた

プナホウの生徒と県内を巡る中で郷土に対する誇りを持つという狙いも、十分に達成されたようだ。

「本校の生徒から『地図には描かれていないけれど、高知にはそれぞれ場所それぞれの人が生きているという重みを感じた』という言葉聞いた時は、心の中で『よし』とガッツポーズをしました」（藤澤先生）

「プナホウの生徒に本校の生徒が『高知にはこんなよいところがあるんだよ』と誇らしげに紹介していた姿が印象に残っています。本当は自分もそれまではよく知らなかった場所だけれど、高知県民の1人としておもてなしの気持ちを持ったのでしよう。高知に住む者の1人という意識になったのは、きっとお客様がいたからです」（井田先生）

プナホウ・スクールの次の日本訪問予定は2年後。チャンスがあれば

プロジェクトの内容を更に磨き上げ、また交流したいと藤澤先生、井田先生は口をそろえる。

「今回のフラダンスのように、今回は本校の生徒が誇りとリーダーシップを持ってプナホウの生徒に教える場面をつくりたいですね。きっと、よさこい踊りなどはびつたりだと思います」（井田先生）

「私は井田先生と『すごく楽しい時間でしたね』とよく振り返るんです。初めての試みで不安もありましたが、キャンプが始まってからはハワイの先生方と相談しながら、時には柔軟にスケジュールを変更し、生徒の状況に合ったプログラムにすることが出来たと思います。まさに、日米のチームでつくり上げたプロジェクトでした。ただ、生徒があれだけ打ち解けたのだから、もっと深みのある協同作業を行い、地域の人々の心に響くコンテンツにまとめ、それをウェブサイトで世界に発信できればよかったです。この反省もあります。グローバル化社会に向けて生徒が成長できるように、私たち教師がもっととどんでいきたいと思います」（藤澤先生）

自分の「出来ないこと」に気付いたから、「出来ること」をしたいと思います



このプロジェクトに参加するまでは、高知にこれほど魅力的な場所が

あり、いろんな人が活躍していることを知りませんでした。正直、それまでは私も高知のことを、ぱっとしない田舎だと思っていましたから、神社仏閣以外にも日本にはよいところがあることをハワイの生徒に知ってもらえてよかったです。

プレゼンテーションの準備では、思った以上にチームとして協力できました。私はハワイの生徒のようにパソコンがうまく操作できなかったので、取材で積極的に質問して、分かったことを一生懸命伝えました。皆が「自分に出来ることをやろう」という気持ちだったと思います。

普段の学校生活では、極端に「自分には出来ない」と感じる場面はあまりありません。でも今回、私は英語やパソコンにかなり苦労しまし

た。そして、出来ないことがあるからこそ、出来ることはしっかり頑張らなければいけないことに気が付きました。

グループで目標を達成するために人に任せきりではいけないし、「間違ったらどうしよう」といった不安を乗り越えて行動することが大切なのだとは思っています。今までの自分は、本当は出来たのにやらなかったこともあると思います。自分ももっと変わるべきなんだと思います。



「外国の人と同じ部屋で生活し、一生懸命話し、プレゼンテーションの準備をしました。外国と日本には違いも共通点もいろいろあると分かりました」（清水さん）